

悠久の京を訪ねて Part III Vol.7



KYOTO
ARCHAEOLOGY CENTER

京は古より人々が集い、その気候・風土の中、人々の生活が営まれてきました。
京都府内の遺跡で多数発掘された出土品により、縄文・弥生時代までさかのぼり、当時の様子を知ることができます。
私たちが住んでいる地域にはどのような歴史があったのか、出土した資料を基に過去の文化やその発祥の歴史を訪ねましょう。

南蛮船が運んだ陶磁器

■ 桃山文化を彩った華南三彩

昭和63年の京都府庁建設工事に伴う平安京跡の発掘調査で、安土・桃山時代から江戸時代初期(16世紀後半～17世紀初頭)にかけての陶磁器が出土しました。その中に明代末期(16世紀末～17世紀初頭)に中国南部から輸入された「華南三彩」の盤(大皿)が含まれていました。

「華南三彩」は、白化粧した素地に橙(茶)色や緑・紫色の釉薬をかけた彩鮮やかな美しい焼き物で、貿易港があった博多、豊後府内(大分市)、堺など限られた場所で集中して



華南三彩盤と瀬戸・美濃・備前の陶器

出土します。

かつてはベトナム産を表す「交趾三彩」と呼ばれていましたが、近年中国南部(福建省)で生産され、南蛮船に積み込まれて我が国にもたらされたことがわかりました。

平安京跡



■ 東南アジア諸国との交易

このほか、南蛮船で東南アジアの港から中国南部の港をへて日本に運ばれた陶器には、タイやベトナム産の焼締陶器(釉薬をかけずに高温で焼いた褐色の陶器)があります。これらは甕や鉢のほか、四耳壺や長胴壺などの壺類です。

京都では、府庁付近でベトナム産の長胴壺の出土例がみられます。ベトナムの国王から徳川家康に壺に入れた糖水が献上されたという文献があることから、液体を入れる運搬容器と考えられています。

このように、16世紀中頃から17世紀初頭に行われた南蛮貿易では、東南アジア諸国から多くの文物が主要な貿易都市にもたらされ、都まで運ばれました。



東南アジア諸国からのルート
〔大友宗麟の戦国都市〕図35に加筆転載